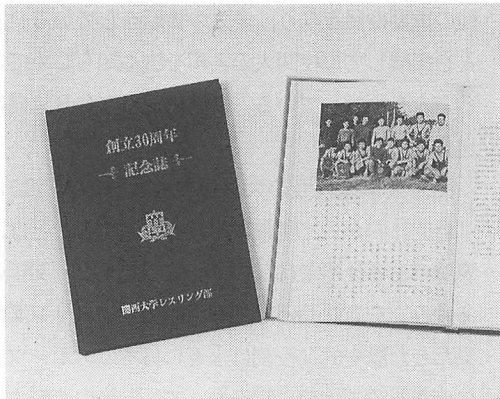


通史：半世紀のあゆみ  
**青春のパライストラ**  
 揺籃期

編集 部

はじめに

関西大学レスリング部OB会が「関西大学レスリング部創立30周年記念式典」を主催したの昭和52年6月11日のことだった。30年間にわたる関係者と来賓各位の総勢250余名が大阪の新阪急ホテル「紫の間」に集った。晴れやかな顔が賑やかに語り合っていた。



写真▷「30周年記念誌」

関西大学レスリング部OB会は、その30周年式典に向けて、『関西大学レスリング部創立30周年記念誌』を刊行している。B5判総ページ数222頁にのぼる豪華版だ。全編アート紙仕立ての「記

念誌」は、巻頭にグラビア頁を設けて「30年のあゆみ」を、まず、写真集で飾っている。ひときわ光っているのが昭和39年のあの東京オリンピック大会の一葉だ。市口政光が真ん中に立って、両手をかかっている。首には「金メダル」がぶらさがっている。グレコローマン57Kg級優勝の表彰台風景である。あの瞬間、全国各地でテレビに釘付けになっていた、関大レスリング部関係者が雀躍して喜んだ有り様が、その一葉の写真の深奥に、浮かび上がってきそうでさえある。さらに全編を彩る「30年間の青春のひとこまひとこま」そのスナップ写真」がすべてを語ってくれている。

「記念誌」の構成は、関西大学レスリング部高堂俊彌部長と、関西大学レスリング部OB会山本雅之会長(1979年没)が感慨を込めた二つの序文で始まっている。高堂部長は言う。「いち早く国際化時代の代表的スポーツであるレスリングの将来性に着目し、心ある斗士たちを募って旗揚げした創立者たちの労苦と努力に対してその功績を讃えざるを得ない」と。山本会長は切実に書く。「想い起こしますれば、あの長かった悪夢のような戦争が終わりを告げ、私も特攻隊より復員して関大に入って2年余り、人々の心は目標を失って揺れ

動いて混乱と荒廃の毎日でありました」と。その時代に「校庭の芝生の上で海水用のパンツで練習が始まったのですから、今から考えると、大変愉快的な姿でした」と余裕をもって振り返ることのできるのは、その後の関大健児が築いた数々の栄光の足跡があってのことだと容易に察しがつく。

ところで「半世紀のあゆみ」を通史として語り始める前に、編集部としては、この「記念誌」を頼りにしながら、その30年間の関大レスリングに対して、いかなる評価があったのかを概括しておきたい。そのためには、「記念誌」に寄せていただいた各方面の祝詞を手掛かりにすることが、それらの方々に改めて敬意を表すためにも、妥当な作業になるのではないかとと思われる。



写真▷30周年当時の「OB総会」

## 1. 評価を洗ってみる

10名が祝詞を寄せている。豪華な顔触れがそのまま「30年のあゆみ」を支えてきた歴史を認識させてくれる。その祝詞の「さわりの一言」を編集順に紹介しておきたい。

関西大学の中義勝学長(当時)は、東京オリンピック当時の八田一朗会長のエピソードに触れて、「八田会長の『眠れ』という号令一つで、バスのなかでも市電のなかでも、即座に全員眠って

しまうようになったという話には感心した。その後、私もこれにならい、何時、どこでも眠ることを工夫している。眠ることも練習のうちであり、精神修養でもあるということだ」と感嘆の意を書いている。当時の日本レスリング界では、八田会長の個性溢れるこうした一連の指導法に若者が全力で呼応したものであった。

学校法人関西大学の久井忠雄理事長(1991年没)は「おめでとうございます。ご苦労さまでございました」と、「30年のあゆみ」の建設に対して率直に敬意を表す。そう、この貴重な大学スポーツ文化は、ひとえに、関大健児が創ってきたものだ。ご苦労さま、と自負して自らを讃えようではないか。この式典の頃、まだ関大は「大学紛争」の後遺症に振り回されつづけていた。レスリングも低迷をかこっていた。久井の「現在のレスリング部の状態は厳しいものであると承知しております」の付言が的確に描写している。

関西大学校友会の樫本信夫会長(1990年没)は「関大レスリング部の先輩は、日本アマチュアレスリング協会、全日本学生レスリング連盟、その他の重要役員となり、多大の貢献をしている」ことを指摘して母校関大の名声を広く知らしめていることを称賛している。この称賛にもOB諸兄は自負してよい。

関西大学体育会の大島鎌吉会長(1985年没)は「目的に向かって勇敢にそれを突破することは、意味のある仕事ではないでしょうか」と「30年のあゆみ」を意味論として捉え、関大レスリングが果たした歴史的な役割は永遠に日本のスポーツ史に刻まれることの自覚をもって、向後の変転する時代の流れを踏まえて対処せよとの忠告を残してくれた。大島鎌吉は、東京オリンピック大会を大成功に導いた、同大会日本選手団長・東京オリンピック選手強化対策本部長を務めた、あの人である。その大島が言う。「歴史とか伝統は、その後

に続く人々が安易に座して守れるものではありません。守るためには何よりも常に創る努力が求められています。古代文明の滅亡史が、いみじくもこのことを教えています」と。この一文を書いた当時の大島は、この言葉をそのまま、日本の世論と、日本スポーツ界に向けても発したのであった。当時の大島は、東京オリンピックの美酒に酔いしれて、無策のままに過ぎてきた「日本体協族」に、このままでは日本スポーツは駄目になると手厳しく奮起を促しつつあった。さらに高度経済成長に浮かれる国民意識に対しても反省を求めつつあった。「青年学徒がその青春を打ち込める環境をつくるよう」努力せよと、訴えつづけたのであった。

日本アマチュアレスリング協会の八田一朗会長（1983年没）は、「八田イズム」と喧伝される確固たる哲学を持った、ユニークな指導者であった。根性論をぶちあげながらも、合理精神を忘れることのない人物だった。東京オリンピックでは5つの金メダルを獲得して、日本を、世界のレスリングの最大強国に押し上げた総帥であった。その八田一朗が、祝詞に、「狩りの犬・獲物を追って・どこまでも」と、関大レスリングの前途に期待している。この一句は、八田が、あらゆるところで、そのころ好んで書いた心境そのものである。

近畿アマチュアレスリング協会の田村亨会長



写真▷八田イズムの神髄を問う遺作自著

（日本アマチュアレスリング協会副会長）は、日本レスリング発展史に触れて言う。「日本のレスリングの今日あるのは八田一朗会長の情熱と苦心にある」のだが、「その陰にある関西地区の八田会長支援の功績は忘れることの出来ないものがある。その中核をなすものは関西大学を率いる松井清君と関西学院大学を率いる井川豊君らの一団であった」と分析している。当の田村もまた、物心両面にわたって、屈指の八田支援者であったことを、この際、述べておかなければならない。

全日本学生レスリング連盟会長で、日本アマチュアレスリング協会副会長の松井清（1995年没）は、「私自身もOBの一員として」の立場で、あの大学紛争を契機にした、不遇の時代の脱却に向けて、「部員一同の奮起、OB諸兄もあらゆる援助を惜まず、一丸となり、……原点に立ち返り新たに21世紀に向かって、地道な努力を重ねられ邁進されることを」切に祈ると訴えている。この頃、松井清は、関西大学体育OB会副会長として、大島会長を補佐しながら、大学当局と掛け合って、母校関大の、スポーツ振興を要求する運動のリーダーシップをとることに献身していた。

西日本学生レスリング連盟を代表して、井川豊会長は、「思えばこの30年間、私の母校（関西学院大学）とはお互いにより意味のライバルとしてマットの上で死力をつくして競い合い、またマットをはなれては温かい友情を育ててまいりました」と学生スポーツの在り方に言及してエールを送ってくれている。そのよきライバル関学も、また大学紛争の劫火に巻き込まれて、低迷していた。「関大、関学ともに不振をかこっておりますが、名門としての誇りをもってお互いに励まし合いながらレスリング発展のために手をたずさえよう」と呼びかけてくれている。

草創期の関西大学レスリング部は、「関西大学レスリング部後援会」に支えられていた。なにせ、

日常の食生活にも不自由をしていた時代である。その後援会の宇賀龍雄2代目会長は、草創期のメンバー宇賀照夫のご尊父であって、物心両面にわたる援助を惜しなかつた一人である。「功績と苦難の足跡を残した」当時の青年の進んできた「道」に対して、その「道の中には世界観があり、ここでは単なる知識でなく英知が育まれる」ことを期待して、支援を買って出たのである。初代監督の村田恒太郎によれば、やはり草創期のメンバー木村勝のご尊父木村篤一初代会長もまた多大に貢献された一人であった。関西大学レスリング部だけに限ったことでなく、戦後の日本の復興の原動力となる青年学徒を鼓舞したのは、こうした善意が働いてのことであった。思えば日本の大学の「OB会」組織こそは、この善意の支援団体であって、世界の文化に類例のないものである。

シンガリは初代監督の村田恒太郎が締めくくっている。「昭和24年4月、戦後の荒廃の中から立ち上がった若人が、関西大学の庭に繰り広げた青春……それが今日の関大レスリング部の輝かしい一頁でありました。それは戦後日本の復興の原動力であったと言っても過言ではない」と述懐する村田監督の声は、当時の日本青年の、「誇り」の叫びの代弁だろう。その日本の「誇り」の精神史をわが関西大学レスリング部は、一翼として、形成してきたことになる。いま、この大事業に携わってきた一人ひとりが改めて、その「誇り」を噛みしめたいものである。

## 2. 青史にとどまらない正史を

編集部ではこの『関西大学レスリング部50年史』の刊行計画にそって各方面に寄稿依頼をしたのはあったが、その文面はつぎのとおりである。

さて昭和23年に呱呱の声をあげました関西大学

レスリング部は、関係各位の心強い数々のご支援を得ながら、爾来半世紀にわたって数々の栄光を刻み、また幾多の苦難を敢然と乗り越える足跡を残してまいりました。この度この節目に際しまして、関西大学レスリング部並びに同OB会では、標記「50周年史」の記念刊行を執り行うことにあいなりました。創部に際しましては、もちろんのことに、無より一気に有に転じたわけではありません。それに先立ちまして、レスリングの愛好者が合い集い、それら先人諸氏が、関西大学レスリング部創設の機運を着々と準備されてこられたのでした。この機運に、終戦後の荒廃から立ち上がった関大健児が凜然として呼応し、関西大学体育会の仲間として出立することになりました。「それは戦後日本の復興の原動力であったと言っても過言ではない」と、当時の指導者の一人が、関大健児のこの快挙を筆述に残して讃えています。記念刊行「50年史」には、こうした青史の数々を正確に留めることを計画しております。ところで戦後日本の復興の原動力は学生スポーツにかぎっての所産ではありませんが、万般にわたって、青年学徒のこの意気軒昂をもって一石を投じたことも事実ではあります。今般の「50年史」編集計画のキーワードは、この「礎」のもとにおける50年間の「正史を残す」とこと、さらにその間に切磋琢磨した仲間たちの「青春の肉声を伝える」ことですが、関係各位のご協力を頼みとしまして、これら二つのキーワードのもとに、関西大学レスリング部の正史を世間に問うことによって、日本の大学スポーツ文化の高揚にも貢献したいものと念願しております。（書簡）

関西大学レスリング部OB会では、足掛け2年間に及ぶ準備期間をかけて、「50周年行事」の内容を検討してきた。その一つが、『関西大学レス

リング部創立30周年記念誌』に引き続いて、「50年史」を刊行することである。正直に言って、2部リーグに低迷しているという関西大学レスリング部の現状から展望すれば、ことに30周年記念行事終了後の「新たな20年」には華々しい記録はない。その間の事情は、あの大学紛争の後遺症がいまだに響いていることだけを指摘しておいて、この「50年史」の全編にわたって詳しく述べられているのでここでは割愛する。一方で、だからこそ、つまり「華々しい記録はない」ことを承知のうえで、「正史」を残すとともに、その不遇の時代にレスリングを継承してくれた彼らもまた「関大健児」と讃えるべき青年たちの息吹を記録するために、この「50年史」編纂事業は、どうしても、やらねばならない仕事であった。関西大学レスリングOB会は総会で「そうだ」と決議したのである。

ここに一文がある。文学部教授の肩書で、レスリング部OBの一人、伴義孝が、関西大学校友会機関新聞『関大』に書いたものである。

松井清本学体育OB会長は長年にわたって日本におけるアマチュアレスリングの普及発展に尽力し、勲四等瑞宝章の栄に輝かれた。昭和7年、大日本アマチュアレスリング協会が設立した草創の頃、10年に関西支部が誕生。早くも松井清氏は理事として協会運営に参画し、以来斯界への貢献が始まる。戦時中禁止されていた外来スポーツが解禁となった戦後、直ちに関西の愛好者を集めて活動再開。大阪府アマチュアレスリング協会会長として牽引車になる。23年本学レスリング部は体育会所属の部に昇格したが、同時に氏の学生レスリングとの付き合いが始まる。29年に本学監督に就任。関西学生レスリング連盟の育成を手掛け、連盟会長として現西日本学生レスリング連盟に発展させる。その後は全日本学生レスリング連盟会長、(勳)日本アマチュア

レスリング協会副会長を現在まで務める。その間東京五輪57キロ級金メダリスト市口政光選手(昭和37年文学部卒)を育て、日米学生レスリング交流を制度化するなど学生スポーツの国際的振興も手掛ける。一方、当初から副会長として31年発足の本学体育OB会活動に精力的に取り組み、現在は会長として、大学紛争以後低迷している本学の体育活動の打開に意を注いでいる。氏は幼稚園経営、サン商事取締役社長など事業でも多方面に活躍されているのだが、学生スポーツ振興のためのボランティア活動は今後益々盛んになりそう。(1988年5月15日号)



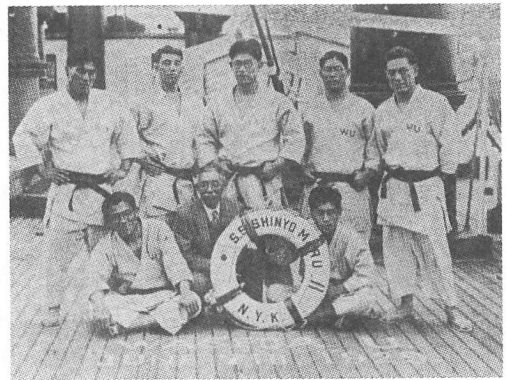
写真▷松井さんの叙勲祝賀会

その記事の見出しには「アマレスの発展に貢献」「松井清OB会長の叙勲お祝い」とある。この記事は、体育OB会の会長としての松井清の叙勲を讃えるためのものである。筆者の伴は、その当時から現在に至るまで体育OB会の事務局長を担当していて、松井を補佐する立場からして、世間体に読むならば、いわばご祝儀「記事」にほかならない。けれどもこの記事には、仲間うちから、レスリングOB会に「正史」でないという反論も寄せられてきている。その一つは、松井清の戦前におけるレスリングとの関係であるらしい。またも

う一つは、大阪アマチュアレスリング協会についてのそれであるらしい。さらにもう一つは、オリンピック金メダリスト市口政光の育成問題についてのそれであるらしい。取り上げた反論のすべてに「……であるらしい」と仮定法で書いたのは、今次の「50周年編集部」が、たとえば「30周年記念誌」や事実関係を総合して判断しても、松井清は、確かに設立当初はともかくとして、長年にわたって大阪府アマチュアレスリング協会の会長として斯界をリードしてきたのだし、市口政光を直接に指導したことはないにしてもやはりレスリング部OB会の強力な支援者の一人として間接的にその「育成」に寄与しているのだから、その一連の事実を再評価しておくべきとの観点に到達したからにはかならない。加えて戦前の活動についてであるが、昭和10年当時、関西大学OBの松葉徳三郎が大阪YMCAの体育主事としてアメリカ型スポーツの普及に勢力を注いでいたのは日本のスポーツ文化史にまぎれもない事実であって、そのひとつとしてレスリングに着目したこともまた事実である。しかしこの時代は柔道選手の転向者を中心としてレスリングは発足したばかりである。松井清も関大予科で柔道に関係していて、その当人の手記に、本人も含めて「関大関係者が（大阪で松葉徳三郎の提唱によってレスリングの関西支部を発足させて）レスリングを」始めたと当時の資料を公開して書いているのだから、これよりほかの詮索は必要ないことである。

ところで日本でのレスリングの定着過程にも触れておくべきだろう。大正13年（1924）に開催された第8回パリ・オリンピック大会に、当時アメリカのペンシルバニア大学に留学していた内藤克俊が日本代表選手として参加している。当時の駐米大使が内藤を日本代表にと推薦してきたからではあった。内藤は、現地から、アメリカ選手とともに同じ船でパリに乗り込んだのである。当時の

内藤はペンシルバニア大学のレスリング部のキャプテンを務めていて、いわばアメリカ型カレッジスタイル・レスリングに習熟していたわけで、ほぼ同型のフリースタイル・レスリングを手際よくこなすことができた。そのため同オリンピック大会ではフリースタイル・フェザー級（当時は61kg級）に出場して、第3位に入賞し、日の丸を高々とパリの空に掲げたのである。こうした先鞭はあったものの国内ではまだレスリングに実際に取り組む者はいなかった。4年後のアムステルダム・オリンピック大会（1938年開催）に、日本は、レスリング代表選手として、当時柔道家として有名であった新免伊助選手を派遣している。だが所詮は付け焼き刃である。第1回戦でスイスのモレー選手と延長戦に及ぶ熱戦を展開したものの無念にも敗退している。



写真▷昭和4年の早大柔道部米国遠征

昭和4年5月、早稲田大学柔道部がアメリカへ遠征することになった。そして各地を転戦し、「柔道」対「レスリング」の試合を行ったのである。このとき部員として参加した一人に、後年日本レスリングの総帥になる、八田一朗がいる。連中は苦戦を強いられ、アメリカのレスラーの体力に驚愕したのである。この「遠征」が、やがて、日本で本格的にレスリングを始めることになる契機に

なることは説明するまでもない。八田一朗が、そこにいたからではある。そして、柔道では、太刀打ちできないと腹を決めたからにはほかならない。

アメリカ遠征から帰った日本選手団は、決して自分たちの敗北を明らかにしようとはしなかった。だから、世間一般は、選手たちが立派な成果をあげたものと信じていた。だが、わたしひとり、日本の柔道がアメリカのレスリングに苦戦したことを公表し、是非ともレスリングを専門に研究すべきであると力説した。(八田一朗著『私の歩んできた道』)

八田の切実な告白である。こうして日本で、レスリングが始まる、素地ができあがった。しかし、である。揺籃期には常に複雑な事情が絡む。もちろんその力学は、日本における、レスリング成立期にも例外なく働くことになる。いわば功名争いではある。その経緯は、これこそが「正史」だとの数々の口伝に詳しいことを、特に、八田一朗が日本レスリングを統率しての以降のレスリング関係者のすべてが知るところである。何事においても、草創の時機には、混沌としたエネルギーが煮えたぎらないかぎり、推進力は生まれえない。これが歴史の常道であろう。

この常道は「関大」にも例外なく働くことだけを、ここでは、述べておきたい。この引喩は、前出の「反論」を封じ込めるために援用したのではない。むしろ「反論」こそが正史であることも認める寛容を、関係者の誰もが持つべきだと言いたいだけのことである。さらに反論への、そのまた「反論」に対してもしかりである。とにかく戦争を挟んでその前後の混沌とした時代のことである。今次の「50年史」では、そうではあっても、できうるかぎりの正史を掘り起こさなければならぬ。第1回編集集会議において、まずその基本方

針を確認することになった。

そのために松井清「叙勲記事」の波紋が参考として検討されることになって、「正史を残す」原案が採択されることになったのである。その検討内容に、誤解を残さないためにも、多少は触れておく必要がある。

検討にあたって、「記事」に対しての「反論」を決して非難しているのではない、ということがまず第1点目であろうか。

その口伝の「反論」を精査すれば、そこにこそ正史の一側面が浮かび上がっているのだけれども、松井清の関西大学レスリング部に対する貢献もまた事実である、ということ認めなければならないことが第2点目であろうか。

さらに第3点目が肝要であって、この「50年史」の編纂にあたっては、一人でも多くの関係者の視点をとおして、正史を語って貰うことを大前提にすることに、その方針を固めたのである。

ところでOB会活動は、究極的にボランティアの善意のそれである。さらに編集部は、すべての関係者のこの「善意の立場」を最大限に尊重する姿勢を堅持する立場を採ることにしたのである。かくして「50年史」の編集方針は決まった。

### 3. 「関大関係者がレスリングを」

その松井清の手記は、「関大レスリング部の誕生するまで」と題して、「30周年記念誌」に収められている。その概要は、日本体育協会編『日本スポーツ100年』(1970年刊)に照らしてもほぼ正鵠を射ている。

この年(昭和10年)の5月20日大日本アマチュア・レスリング協会の日本体育協会への参加が認められた。先ず1月大阪に協会の関西支部が出来、全国的統括団体として組織の強化をはか



るとともに4月14日第1回東西対抗試合（関東5－関西2）を大阪YMCAで開き……。 （日本体育協会編『日本スポーツ100年』）

その第1回東西対抗試合の経緯を、松井清は、当時のパンフレットなどを頼りに詳細に書いている。関西大学の関係者にとってはことさらに、前出の『日本スポーツ100年』には記載されていない、精度の高く密度の濃い記録を知ることのできるものなので、そのままを転載しておく。

昭和10年1月27日、当時大阪YMCAの体育主事であった松葉徳三郎（関大OB）の提唱により、広井忠雄、和歌山中学に奉職中の早大OBの宮崎米一等によって大阪YMCAにおいて、大日本アマチュアレスリング協会関西支部が設立された。当時の役員と部員は次の通りである。常務理事・広井忠雄（早大OB）、松葉徳三郎（関大OB）、理事・宮崎米一（早大OB）、新田新一（早大OB）、野瀬隆進、評議員・射延治郎（同大OB）、佐藤信一（東京高師OB）、三宅二郎（関大OB）、部員・松本六理、津森一夫、松田博之、吉野耕造、琴川悟、生田禾苗、渋谷喜章、松井清（以上関大）、森本義雄、長田瑞輔、井上勇、藤田義治（以上関西支部）。事務局を大阪YMCA体育館内に置き、連夜宮崎理事長をコーチにYMCAのレスリング道場において練習に励んだものである。当時は現在のように技も多彩ではなく、殆どが柔道選手の転向部員であり、主にタックルと、投げ技が多用され、何が何でも相手の背後に回りポイントかせぎに努めたものである。グラウンド・レスリングになれば、ハーフェルソンがよく使われ、試合は20分間休憩なしの連続試合であった。これを思えば現在の3分3Rのラウンド間の休憩1分という「3ラウンド制」とは比べものにな

らない。が、試合における選手のスピードは今ほど展開の多いものではなかった。この試合時間は、戦後15分の試合、12分の試合、そして5分2Rの試合とルール変遷を経て現在の3分3R制になった。昭和10年4月14日、先ず事業として、東西対抗を大阪YMCAに於いて行なう。

関東 5	—	2 関西
B 清水◎	フォール	佐藤
B 渡辺	フォール	◎松田（兄）
Fe 西出◎	フォール	松田（弟）
Fe 秋田◎	フォール	島田
L 菊間	フォール	◎松本
L 水田○	判定	津森
W 平松◎	負傷棄権	須天

このころ東京では早稲田大学に続き慶応義塾大学、明治大学、少し遅れて専修大学にレスリング部がそれぞれ設立された。（松井清手記）

松井が正確に記録する「第1回東西対抗戦」には、これも松井の手記にある当時の関大生であった選手が活躍している。この記録のほかにも、松井は、手記に留めている。昭和11年は第11回ベルリンオリンピック大会の年だった。この大会の壮行試合が、同年4月15日に甲子園庭球場コートで、「五輪代表チーム」対「関西支部チーム」間で行われている。結果は五輪チームが7フォール勝ちと1負傷棄権勝ちの8勝をあげて圧勝しているのだが、関西支部チームには、8選手中、6名が関大生で占められている。その6名は、バンタム級の琴川、フェザー級の津森、フェザー級の松田、フェザー級の吉野、ライト級の松本、ウェルター級の松井である。

このように関西大学関係者は、戦前の「関西支部」時代のレスリングにも大いに関与していたのであって、戦後逸早く、レスリングの解禁を待って、小田原徳善や村田恒太郎などの骨折りで、大



阪府レスリング協会が設立されることになるのだが、とにかくにも関大とレスリングの結びつきは古いものではあった。松井清は、「30周年記念誌」で、昭和29年に関大レスリング部監督に就任した弁を、次のように語っている。

関西大学レスリング部の前身は、終戦間もない混乱期に、同好会として発足しました。同好の士の情熱が実り、昭和23年に、体育会加盟の正式団体として認められました。以来昭和28年度迄は、明治大学OBの村田恒太郎氏が初代監督として、レスリングの「レ」の字も知らなかった部員を何かにつけ指導者として面倒みて頂いておりました。氏が勤務のご都合で東京に帰られることになり、その後の監督を私が引き受けることに相成りました。村田氏のご献身に心より感謝致すとともに、責任の重大なるを思い、監督を務めました以後の5カ年間の思い出を回顧しつつ、この記念すべき「部誌」の一頁に印したく存ずる次第であります。

さて松井清も書くとおり、関大レスリング部の青史は昭和23年から始まる。とはいえ、関西大学「30周年記念誌」に併録されている関西大学レスリング部OB会名簿には、松井「手記」にある前出の氏名も含めて、戦前組の関係部員として、下記にわたる先輩諸氏の氏名が記録されていることも事実である。多くは柔道関係者であった。

松田博之・藤原賢治・生田禾苗・渋谷喜章・松井清・吉野耕造・津森一夫・琴川悟・島田賢治・松本六理

これら先輩諸氏の多くは物故者となられているはずである。創部50周年を迎えるこの機会に、これら先人の「道のり」に対しても改めて大いなる

敬意を表しておくべきことが、意義ある「50年」を一層と輝かさせてくれることになろうか。感謝。

#### 4. 草創の記

昭和23年、関西大学レスリング部は誕生した。関西大学は、運命的に、一人の人物と結ばれていた。その人物こそが村田恒太郎その人である。その村田恒太郎の「30周年記念誌」の手記「初代監督として」などを参考にして、草創期の関大レスリング部を素描することにしたい。

関大レスリング部の創生は、昭和22年に現在のOB会長山本雅之氏が、当時、関大体育会委員としてレスリング部の創設に着手したことに一頁を印す。これより先同氏の出身校である大阪市立中学校（旧制）の柔道部では当時米軍関係によって禁じられていた柔道に代わるものとして、いち早くアマチュアレスリングの導入に着目し、当時の柔道部師範小田原徳善氏が母校明治大学レスリング部に、その指導を呼びかけ、学徒動員より復員して明大レスリング部の復活に努力していた我々がそれに応えて、大阪市立中学校の合宿指導にあたった。その時の同校の主要メンバーが、関大レスリング部創生期の主体を形成していたことになる。同時に前記の山本氏が当時大阪市立中学校の一期生の関係で、つききりで、合宿のマネージメントをするかわら、創立へ一歩一歩前進するために運命的に働いていたのである。（村田「手記」）

運命と運命がぶつかったのであった。呼吸と呼吸が呼応したのであった。昭和22年と言えば、田村泰次郎の小説『肉体の門』が人気を博した時代である。映画化されたりもして、当時の青年たちに、「肉体の解放こそ人間の解放」だとする作

家田村の新時代の呼びかけが、爆発的に受けた時代であった。いわばそんな軟派の時代への転換期に、この運命と呼吸が、関大健児たちを、硬派の、しかも切磋琢磨を切に求めたレスリングに駆り立てたのであった。山本雅之は述懐している。

(ちょうどそんな若者たちの心が揺れ動いていたとき) 故小田原徳善先生より関大にレスリング部を創設したらどうかとの話が持ち込まれました。当時私は拳法部に入っておりまして初段の免許を取った時でもあり正直に言って驚きと戸惑い感が先に立ちました。何となれば私は西洋の格闘技に理解もなく、日本の武士道にのみ人生の活路ありと考えていたのです。それにレスリングというスポーツはどのようなことをするのか、まったく見当が付かなかったからであります。幸いなことに私の中学校時代の後輩に相撲部や柔道部出身の者が6、7人おりましたので、この話を持ちかけましたところ、みな、快く創部に賛同してくれましたので、ここに宇賀照夫、古沢、安川、友田、東条、田中、木村勝の諸氏とともに、関西大学レスリング部が昭和23年春に歴史的な発足に踏みだしたのであります。……当時は何処の家庭でも今日と違い経済状況が非常に苦しかったものですから、学業と練習に専念することが大部分の部員には、非常に難しく、部員の半分はアルバイトなどをしながら、学費の調達に懸命で、その費用の一部を持ちよって駐留米軍のテントを練習用マットに購入した時の喜びなど、いまだに忘れることはできません。その頃(昭和24年)明治大学OBの村田恒太郎先生を初代監督として迎え、押立、下村、木村晴、黒木、宇田、梶原などと各クラスに陣容が整い、村田監督のなみなみならぬご苦勞と部員の精励の結果、汗と涙で勝ち取った初の関西学生リーグ戦の優勝の喜びが30年

の長い歴史のいまでも私の脳裡に判然と焼き付いております。(山本雅之・S25年卒・1991年没)

正史を残すためには、ここに一切の、脚色は必要ない。村田「30周年記念誌手記」をそのまま大部にわたって転載することにしたい。



この年(昭和24年・1949)、宇田、梶原、押立、木村(晴茂)、黒木などが入学し、熱血漢ぶりを発揮する。同じく下村が関大に転学してきて再上級生となり、初代主将となり着々と「部」の形態を整えていくのである。うぶ声をあげた頃から、この頃の経過は、全員の部創設に対する情熱の一致と言えるだろう。

昭和24年、初代監督に私(村田恒太郎)がその就任を正式に要請され、心からの感激をおぼえてお受けしたわけであったが、それから30年の今日、昨日のこのように想い込される数々が限りなく去来する。

この頃は、私は、前記小田原部長の招きにより、(東京から)枚方市へ居を移し、大阪市立高等学校の指導の傍ら当時の関大天六学舎へ出向いて指導に当たった。

それは前記山本氏の熱烈なすすめによる男の心意気と言ったものを感じるとともに、戦後私の母校明大レスリング部の復興に尽力したことを思い合わせば、創生期の苦勞は手にとるように理解できたことが私を奮い立たせたのであった。当時の山本氏の努力には心から敬服し尊敬の念を禁じえなかったことを特記したい。

その後、私の監督活動に便を与えんために、当時関大の後援会役員であった故木村篤一氏(創立メンバーの一人であった木村勝氏のご尊父)の経営する大阪淡水魚具(株)に就職することを得て、関大レスリング部の指導にご配慮を賜ったことは忘れえがたい思い出であった。(村田)



やはり青年の情熱と真摯な姿が躍動するところには、「夢」も「善意」もが結実するのである。昭和23年の創部当時からの活動状況については、村田「手記」を頼りにしながら、改めて別の章において書くことにしたい。

## 5. 創部時の練習

物のない時代である。練習と言ってもたやすいものでない。腹がへる。学資稼ぎのアルバイトもしなければならぬ。喰うものもない時代であった。その当時の練習風景を振り返っておかなければならない。まず村田「手記」に拠る。



さて、現実の部活動は今にして思えば、後輩諸君が想像できない種々の苦労もあったが、またそれが今日の楽しい思い出として価値あるものであった。当時は、戦後の物資不足時代であり、もちろん資金もなく、練習マットの購入もできない苦しい部のスタートであった。

23年の創部当時、道場は千里山学舎の経済学部前の青空道場・芝生の上であったが、我々は黙々と裸で青春をぶつけあっていただけでよかった。それほどに純粋な気持ちであったから、何の不足も感じなかったのではなかろうか。芝生の道場は小石がまじっている。擦り傷には小石が食い込んでいたものだった。一時、山本君の努力で柔道場などを使用できるようになったり、やりくりの時代であった。

その後24年になってからマットも調達し天六学舎の地下教室で練習するようになり、練習場の感がそなわったものの、今のようにビニール製のものではなく目の粗い帆布であるから、体中に擦り傷の絶え間がなく、赤チンをぬった体は遠目には赤鬼のように見えたものであったが、傷の赤チン

は、関大レスラーの勲章であり、誇りであった。

当時の私は、戦前（戦中はレスリングが禁止。）、戦後にわたる全日本フェザー級のチャンピオンであったから、現役のバリバリであって、若さと馬力を若い創立メンバーに惜しくもなくぶつけたものであった。特に初代主将ということもあって下村君とは残酷物語といった練習を繰り返したものであった。彼もよく耐えた。それもこれも後に続く者のためであったが、創生期の「力」は、全員一致して私の暴力的でさえある練習によく応えてくれて、脱落者もなく2年目を迎え、まさに関西大学レスリング部はロケット弾のごとくレスリング界に切り込んだものであった。（村田）



写真▷山本雅之さん（創部30周年当時）。「…あの長かった悪夢のような戦争が終わりを告げ、私も特攻隊

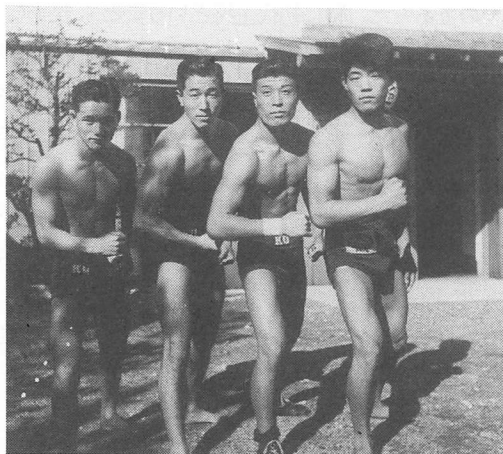
より復員し関大に入って2年余、人々の心は目標を失って揺れ動いて混乱と荒廃の毎日でした」と語る山本さんが創部の縁の下の力持ちでした…。



山本雅之も「陣痛」を経た苦しみと、「創生」の喜びと、その「快挙」の感激を書いている。

なにぶん誰も経験がないものですから、連日故小田原先生に相談し、ときには東京の八田先生（現日本レスリング協会・会長）を青山のご自宅に訪問してレスリングの基礎知識などを教わり、薄氷を踏むような気持ちで（した。）芝生の上で練習するのですから毎日怪我人が出たのも、今から思いますと、よく辛抱して頑張った

の一語に尽きると思います。……（創部2年目の昭和24年に早くも勝ち取った「関西学生リーグ戦初優勝」を経て）学内体育部においてAクラスにランクされ関大レスリング部の黄金時代を迎えたのであります。（「30周年記念誌」）



写真▷創部当時の仲間・昭和25年  
左から=安川・宇田・下村・梶原の各氏

## 6. 輝かしい初陣

昭和24年、関西大学は、関西学生レスリング連盟に加盟する。関西学生レスリング連盟は終戦の明くる年、すなわち昭和21年（1946）に結成されている。連盟結成時の加盟大学は、同志社大学、関西学院大学、大阪機械工専の3校であった。その当時の様子を関学OBの井川豊が、『関西学院大学レスリング部創部50年史』に、語っている。

柔道部をレスリング部に転向させ、昭和20年10月に正式に関学レスリング部として発足いたしました。勿論当時は練習すると言っても道場な

どはなく図書館の芝生の上で、（駐留米軍から手に入れた）英語のレスリングの解説書をひもときながら見よう見まねで技の習得に励んだものでした。これが関学レスリングの発足であるとともに、関西における草分けとなったものでした。……他方、同志社にも（当時の）柔道部の方々も復員してこられ、（同じように）柔道部からレスリング部に転向してまいりました。これと機を同じくして大阪機械工専も（柔道家を中心に）レスリング部が発足し、昭和22年から3校によるリーグ戦が行われるようになりました。……その後昭和23年には関大にもレスリング部が創設され、以後、関・関・同を中心とした3校対立の時代が続くことになりました。

井川記述は続く。その「手記」の追記にこう書かれている。「昭和26年に今まで禁止されていた武道が解禁され、これにともなって昭和20年からレスリング部として引き続いてきた柔道部が別れて新しく柔道部として（再）発足いたしました」と。だとすれば生粋のレスリング部として船出したのは「関大だけだ」ということになる。それはともかくとして、関大は加盟初年度の春のリーグ戦で勝ったのである。関学も芝生で練習していた。関大も、しかり。関学も、海水パンツで練習していた。関大も、しかり。関学も、物資不足に悩んでいた。関大も、しかり。では、何が違ったのか。それは、青春のパライストラ（古代ギリシアの「レスリング競技場」の呼称）のみが知ることはないのか。そしてその「答え」こそは、いつの世でも、青年たちが追い求めるロマンにほかならない。その初陣の様については詳しく後述したい。

（完）